

## 故入来院貞子さんと薪能

下土橋 渡



鹿児島県薩摩川内市入来町の地域おこしグループ『入来花水木会』代表として、七回にわたって入来薪能を主催され、ホームページを開設し旅行記やレポートなどをアップしたりしている著者の活動の最も良き理解者だった入来院貞子さんが、つまずいて転倒されるという不慮の事故による脳挫傷で平成二十三年五月二日、死去されました。七十八歳でした。

さつま町船木の著者の自宅より車で二十分足らずのところにある入来麓は、町並みが中世の名残をよく残していて、国の重要伝統

的建造物群保存地区（武家町）に選定され、入来院氏が本拠とした中世の山城・清色城（きよしきじょう）跡も国の史跡に指定されています。入来院氏は、鎌倉時代、関東の豪族として、現在の東京・渋谷に城を持ち、相模の国（現在の神奈川県）に勢力をもっていた渋谷氏が、鎌倉幕府から薩摩国の入来院などの諸郷を与えられて下向し、後に入来院と名乗るようになつたのが始まりです。戦国時代を乗り切つて薩摩藩を確立した島津義久、関ヶ原敵中突破で有名な義弘、秀吉に最後まで抵抗して自害し今でも金吾さまと呼ばれ親しまれている歳久兄弟の母は、入来院の出でした。夫で庶流入来院当主の入来院重朝（しげとも）さんが定年退職されたのを機会に、平成六年重朝さんとともに東京から入来に移り住んだ貞子さんは、先祖の渋谷氏が関東から下向して七百五十年になるのを機に、町おこし

に何かしたいと考えていました。そんな折、県会議員をしている人から『鹿児島には能楽堂がない』と聞いたのを思い出し、脳裏に、ふと『薪能』という語が浮かびました。とい

うのは、入来院夫妻は、能楽観世流シテ方の若松健史先生（重要無形文化財総合指定保持者で平成二十二年九月に死去）に謡曲の指導をしてもらっていて、観世流の人たちを知つていたのです。頼めば来てもらえるのでは、と思つて『入来薪能』の企画を思い立ちました。

資金援助してもらえないものか、地元行政（当時は薩摩郡入来町）に相談に行くと、町長は『議会の承認が得られないから出来ない』といい、議員に聞けば『文化事業には誰も反対したことはない』という水掛け論。結局、地元行政の支援も理解もないまま、私的な負担も限界ぎりぎりのなかで、能に全く素人の

地域おこしグループとその支援会の人たちの手づくりで平成十一年に第一回の入来薪能を開催することになりました。

何よりも心強かったのは、町の次代を担う若い実力者たちが支援会を作つて、手足になつてくれるということでした。彼らはイベントの実行にも手慣れていて、何よりも問題な駐車場や会場の設営など、具体的な手順はすっかりお任せできるということでした。しかし、『能』は鹿児島の人たちにはほとんど馴染みのない世界のもの、地域おこしグループのメンバーも支援会のメンバーも全員がまだ一度も能を見たことがありませんでした。恩師で入来薪能の企画を引き受け下さった若松健史先生が岡山の最上稻荷で薪能を開催するのを知つていた貞子さんは、実際を見なくてはと思い、岡山に見学に出かけます。

費用節減のため、県議の奥さんに借りたワ

ゴン車に乗り、平成十一年八月十七日朝七時、支援会の会長、音響照明担当、会場設営担当、舞台を作る大工さん夫婦とともに入来を出発、交代で運転しながら九時間かけて最上稲荷に着くと早速、大工さんはメジャーで舞台の高さを計つたり、音響係はマイクの所在を確かめたり、実地見学と調査に取りかかりました。このようにして、平成十一年八月二十五日、東京から観世鍊仙会（てつせんかい）一行の皆さんにおいて頂き、第一回入来薪能（演目『天鼓』前シテ・後シテ、若松健史）が開催されました。第一回が成功裏に終ったのを皮切りに、昨年（平成二十二年）までに七回の入来薪能が開催されました。

五年ぶりに第七回の入来薪能が開催されたのは、昨年八月二十八日のことでした。演目は、木曾義仲（源義仲）とその愛人・巴の悲劇を題材にした『巴』（ともえ）でした。前

場で、『ここ栗津が原に木曾義仲の御靈がおられる。そこにおいての僧にどうか供養を願いたい』と、里女（前シテ）が涙ながらに訴えます。その前シテを舞われた若松健史先生が、残念なことに、三週間後の九月二十日に出血性心不全のため七十五歳で急逝されたのです。若松健史先生のシテ装束姿の舞台は、入来薪能の『巴』が最後だったそうです。貞子さんのお悲しみは如何ばかりだつたことでしょうか。

同年十二月、貞子さんは、若松健史先生の最後の装束姿となつた前シテの写真を十数枚A4サイズに印刷され、額にいれて、地域おこしグループとその支援会のメンバーにプレゼントされました。長年の労をねぎらつてのことでした。また、一枚を若松健史先生の奥様に贈られました。今になつてみれば、図らずも貞子さんの形見となつてしましました。

地元川内が舞台となつてゐる能に『鳥追舟』(とりおいぶね)があります。室町時代の謡曲師、金剛弥五郎の作といわれ、薩摩国が舞台になつてゐる唯一の能ですが、第四回入来薪能(平成十四年)でこの『鳥追舟』が舞われました。貞子さんのエッセイにつぎのようにあります。

—(鳥追舟は)今までの曲よりワキツレと子方の二名が増えるばかりでなく、ワキも上級な人でなければならぬということで、京都の先生をお願いする。ハタラキというお手伝いも一人増えて費用は相当かかるのだが、後々にも川内市(現薩摩川内市)の記録に残ることを考えれば、ここは頑張るしか仕方ない。—

入来院夫妻の愛猫ピッピーちゃんのこと

をメールマガジンに書かせてもらうことになり、ピッピーちゃんの写真を撮りにご自宅に

お伺いしたのは、四月十一日のことでした。そのとき、貞子さんが嬉々としてピッピーちゃんを追つかけていらした光景がいまだに目に焼きついでいます。書き上げた原稿を貞子さんにお目通しして頂き、返事として四月二十四日、つぎのメールを頂きました。

立派なピッピーちゃんを有難うございます。  
もし最後に加えられれば、『お返事するピッピーさんは、毎朝一人が仏壇に般若心経を上げるときちゃんと並んで座つてゐるそうです』  
というのは如何ですか。

では5時半にお待ちします。

入来院貞子

翌二十五日の夕方五時半に、お借りしていた本を返しにご自宅を訪問し、お土産に貞子さん手づくりの筈のおこわを頂いて帰りました

た。これがお会いした最後になりました。

5月5日、葬儀・告別式が二時間にわたつてしめやかに執り行われ、八人の方が弔辞を述べられました。全国にトップレベルの方をたくさんお知り合いに持たれ、またご自分もトップレベルの才能をお持ちの方でしたが、そうしたことを微塵も感じさせない方でした。それがまた貞子さんの存在の大きさだったよう思います。『自宅を訪ね、おとないを入れれば、今でも『どうぞ』と優しい声で迎えて頂けそうな気がしています。改めて、入来院貞子さんのご冥福をお祈り申し上げます。



愛猫ピッピーちゃん  
(平成23年4月11日撮影)



第7回入来薪能で前シテを舞われる故若松健史氏